名取事務所・エーシーオー沖縄『カタブイ、1972』　撮影：坂内太

［現代演劇］

復帰50年の沖縄、日本と世界を考えて

山口 宏子

2月、ロシアがウクライナへ侵攻した。避難する女性や子どもたちの姿や破壊された街を伝える映像で、私たちは戦争の現実を目の当たりにした。日本でも周辺の安全保障環境が厳しさを増しているとして、岸田政権は12月、防衛力の大幅強化を打ち出した。戦後続けてきた抑制的な安保政策は大きな転機にさしかかっている。

沖縄の歴史と現実を見つめた新作劇

世界と日本が大きく揺れた2022年、沖縄は本土復帰50年を迎えた。

沖縄は、先の大戦の末期、激しい地上戦で県民の4人に1人が犠牲になり、敗戦後は

米国の統治下におかれた。1972年の復帰後も、在日米軍施設の大半が集中したままで、負担と危険はいまも県民に重くのしかかる。そうした現実と歴史を見つめた新作劇が数多く発表された。上演順に振り返ってみる。

畑澤聖悟作『hana ―1970、コザが燃えた日―』（ホリプロ）は、バー「hana」を経営する女性とその家族らの一夜が描かれる。米兵による交通事故や犯罪が正当に裁かれないことに怒った住民たちが軍関係者の車を焼いた、1970年のコザ（現・沖縄市）の「暴動」を背景に、戦中・戦後の苦難、復帰への期待、内地の人間の無神経さ、ベトナムの戦場へ送られる米兵の恐怖など様々な要素を凝縮した戯曲を、長年沖縄でワークショップを続ける栗山民也が、深い共感と不条理な現実への怒りを込めて力強く演出した。

若手の藤田貴大が率いる「マームとジプシー」は、「那覇文化芸術劇場なはーと」と共同で『Light house』（藤田作・演出）を企画制作。「ひめゆり学徒隊」を描いた2013年初演『cocoon』（今日マチ子原作、藤田作・演出）をきっかけに度々沖縄を訪れてきた藤田が、現地で感受した戦争の記憶、新たな基地建設、日々のくらしなどを「水」のイメージでつなげて構成した。夏には『cocoon』も全国で公演した。

史実をもとに戦争を描き続ける劇団チョコレートケーキは「生き残った子孫たちへ　戦争六篇」と題して6作品の一挙上演を敢行した。その中の新作『ガマ』（古川健作、日澤雄介演出）は、苛烈な戦闘の中、洞窟（ガマ）に居合わせた女学生、教師、兵士らを通して、それぞれの沖縄戦を浮かび上がらせた。

KAAT神奈川芸術劇場は沖縄在住の若手劇作家、兼島拓也に戯曲を依頼し、演出の田中麻衣子らと1年以上かけて『ライカムで待っとく』を作った。神奈川在住の雑誌記者の浅野はひょんなことから、1964年に沖縄で地元の青年が米兵を死傷させた事件の裁判を取材することになり、被告の一人が妻の祖父だったことを知る。浅野は過去と現代が奇妙にまじりあった世界に巻き込まれ、かつて琉球米軍司令部（ライカム）とその関連施設だった場所が、いまはその名を残したまま大型商業施設になっていることが象徴

ホリプロ『hana―1970、コザが燃えた日―』
撮影：宮川舞子／写真提供：ホリプロステージ

する沖縄の現代史と直面する。ユーモアもある巧みな語り口の中から響く「沖縄は日本のバックヤードか」という怒りと問いが観る者に鋭く刺さった。

名取事務所（東京）とエーシーオー沖縄の共同制作『カタブイ、1972』は、作・演出の内藤裕子が丹念なリサーチを踏まえ、沖縄本島にあるサトウキビ農家の居間から、復帰までの半年間を見つめた。カタブイとは、ある場所が晴れていても、少し離れた場所は大雨という沖縄の夏に見られる天候のこと。くらしの視点から語られる沖縄の戦後と、復帰や基地問題について意見が異なっていても、互いの考えを尊重し合う家族らの会話から、現代に通じる問いが静かに広がる。

KAAT神奈川芸術劇場『ライカムで待っとく』　撮影：引地信彦

「ものを言う自由」をめぐって

ロシアでは「虚偽情報」を拡散すると最長15年の禁錮刑を課す法律ができ、報道やSNSなどが厳しく規制されている。中国に返還されて25年たった香港では言論統制が強まり、1989年6月4日に起きた天安門事件の追悼集会も摘発の対象になった。「ものが言えない社会」が広がっている。

Pカンパニーが取り上げた香港の作品『5月35日』（莊梅岩作、マギー・チャン・石原燃（ねん）訳、松本祐子演出）の主人公は北京にくらす老夫婦。天安門事件で亡くなった息子を広

場で弔いたい――それだけを願って命がけの行動を企てる。病身の二人の強さに粛然とし、その思いを圧殺する体制に慄然とする。

これは決して他人事ではない。こまつ座『貧乏物語』（井上ひさし作、栗山民也演出）は、1934年、治安維持法で拘置中の経済学者・河上肇の留守宅が舞台。そこに集う女性たちのやりとりが、「言論」の重さと、いつの世にも通じる女性が生きることの困難を照らし、1998年の初演時より強い実感を伴って客席に迫った。

Pカンパニー『5月35日』　写真提供：Pカンパニー

こまつ座『貧乏物語』　撮影：宮川舞子

二兎社は2005年初演の代表作『歌わせたい男たち』（永井愛作・演出）を新キャストで上演した。都立高校の卒業式の朝、「君が代」斉唱を強制する東京都の通達を受け、無難に式を進めたい校長、反対する社会科教師、ピアノ伴奏をする音楽講師が、それぞれの立場と考えをぶつけあう〝爆笑悲劇〟。この問題が起きて20年たつのに、作品が古びない現実が恐ろしい。少数意見を持つ者を冷笑し、ためらいなく潰そうとする若い教師らの姿がいまの言論状況を想起させ、新たな不気味さが加わっていた。

広島のカキ加工工場の日常と「西部劇」を重ねたシアターコクーン『広島ジャンゴ』（蓬莱竜太作・演出）は、奇想に満ちた華やかなエンターテインメントの中で、同調圧力の残酷さ、「独裁」を生み出す土壌とそれに抗う勇気を語った。

芸術監督「第二章」、新国立劇場の地道な取り組み

新国立劇場が開場して25年。公共劇場も増え、芸術監督制度も広がった。その「第二章」といえる動きが始まっている。4月に東京の「世田谷パブリックシアター」の芸術監督に

就任した演出家・俳優の白井晃が、同時期に埼玉県の「彩の国さいたま芸術劇場」の芸術監督に就いた振付家・ダンサーの近藤良平、KAAT神奈川芸術劇場の長塚圭史、新国立劇場の小川絵梨子らに呼びかけ、観客に公開しながら芸術監督の役割を改めて考える議論を重ねている。長野県松本市「まつもと市民芸術館」でも同劇場を20年率いた串田和美芸術総監督が23年春の退任を前に、連続シンポジウムを開いている。社会と演劇、劇場との関係をより深く考えようという機運が高まっている。

小川絵梨子が芸術監督を務める新国立劇場は、人材育成など地道な事業に取り組み、新世代の作り手を積極的に起用した。英国ロイヤルコート劇場と共同で開催した2年がかりの劇作家ワークショップには若手14人が参加。そこから生まれた須貝英(えい)作『私の一ヶ月』(稲葉賀恵(かえ)演出)が上演された。横山拓也作『夜明けの寄り鯨』を演出した大澤遊は、上演を前提とせず作品探究をする「こつこつプロジェクト」に参加した一人だ。このほか、奇想と歪んだ笑い、同調圧力の恐怖が溶け合った『貴婦人の来訪』(F・デュレンマット作、小山ゆうな翻訳、五戸(ごのへ)真理枝演出)、19世紀末から第2次大戦後までのユダヤ人一家の4世代にわたる運命を描く『レオポルトシュタット』(トム・ストッパード作、広田敦郎翻訳、小川絵梨子演出)なども充実した舞台成果をあげた。

新国立劇場『レオポルトシュタット』　撮影：宮川舞子

強い印象を残した「女性」たち

作り手も、作品のテーマも、「女性」が強い印象を残す一年だった。

活躍が特に目立ったのは演出家たち。稲葉賀恵は新国立『私の一ヶ月』に加え、オフィスコットーネ『加担者』（F・デュレンマット作、増本浩子翻訳）、PARCO劇場『幽霊はここにいる』（安部公房作）で「この作品をいま上演する意味」を鮮やかに示した。世田谷パブリックシアター『毛皮のヴィーナス』（D・アイヴズ脚本、徐賀世子翻訳）の五戸真理枝、『建築家とアッシリア皇帝』（F・アラバール作、田ノ口誠悟翻訳）の生田みゆきも光った。３人とも文学座の所属。彼女らの先輩・松本祐子は文学座『マニラ瑞穂記』で、明治期に始まった日本のアジア進出と異国で身を売る女性たちを見つめた秋元松代の戯曲を骨太に演出した。

PARCO劇場『幽霊はここにいる』　撮影：宮川舞子／写真提供：株式会社パルコ

東京演劇アンサンブル『彼女たちの断片』（石原燃作、小森明子演出）は人工妊娠中絶薬を入り口に女性と社会を考察。グッドディスタンス『月と座る』（大岩真理作、西山水木演出）は、ホームレスの女性が命を奪われた事件に思いをはせながら、都会に生きる孤独を繊細に見つめた。

翻訳劇ではシス・カンパニーが米英の女性劇作家による鮮烈な２作『ミネオラ・ツインズ』

劇団た組『ドードーが落下する』　撮影：岡本尚文

（ポーラ・ヴォーゲル作、藤田俊太郎演出）と『ザ・ウェルキン』（ルーシー・カークウッド作、加藤拓也演出）を上演した（翻訳はともに徐賀世子）。

男性の若手では、加藤拓也が、妊娠・出産の決断をめぐる夫婦のコミュニケーションの揺れやずれを細やかにつづった『もはやしずか』、友人関係を冷徹に見つめた『ドードーが落下する』の作・演出で力量を発揮。中高年の引きこもり問題に光を当てた俳優座『猫、獅子になる』（横山拓也作、眞鍋卓嗣（たかし）演出）も注目された。

ベテランの作・演出作品では、人間の内面の不可思議に分け入る岩松了の『青空は後悔の証し』『クランク・イン！』、ケラリーノ・サンドロヴィッチの心優しき佳作『しびれ雲』、個人の欲望と戦争を重ねた松尾スズキ『ツダマンの世界』などに見応えがあった。

「演劇の力」を信じて

商業劇場での大作のほとんどをミュージカルが占める中、画期的なせりふ劇２作が大ヒットした。

東宝『千と千尋の神隠し』は宮崎駿監督の名作アニメ映画をジョン・ケアードが翻案・演出（今井麻緒子共同翻案）した。10歳の千尋が不思議な世界に迷い込み、神様たちが集う湯屋で働く物語。空を飛ぶ場面は俳優たちが千尋を抱き上げ、異形の人々や神様は、俳優の身体とパペット、仮面などを組み合わせて表現する。緻密な工夫と人の力を積み重ね、ダイナミックでありながら、手作りの温かさが伝わる舞台を生んだ。

東宝『千と千尋の神隠し』　写真提供：東宝演劇部

TBS・ホリプロ 舞台『ハリー・ポッターと呪いの子』　撮影：宮川舞子／写真提供：TBS・ホリプロ

ホリプロ・TBSによる『ハリー・ポッターと呪いの子』（J・K・ローリングらのオリジナルストーリーをもとにジャック・ソーン脚本、ジョン・ティファニー演出、小田島恒志・小田島則子翻訳）は、魔法の世界が次々と繰り広げられる圧巻の舞台だ。こちらも俳優の身体と技術を基本に、卓抜なアイディアで息を呑む視覚効果を生みだす。親子関係を軸にした台本も優れており、せりふ劇では日本で初めて無期限ロングランに挑んでいる。

客席の人数制限などの指針は緩んできたが、コロナは依然として演劇界を苦しめ、毎日のように公演中止が発表されている。

そんな中、NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』の脚本で改めて評価を高めている三谷幸喜が『ショウ・マスト・ゴー・オン』（シス・カンパニー、1991年初演作の改訂版）の作・演出で劇場に帰ってきた。次々と出来（しゅったい）する災難を乗り越え、公演をやりとげる舞台監督らを活写する喜劇だが、現実に俳優4人が次々とけがやコロナ感染などで休演を余儀なくされ、その役をすべて三谷が代わって演じ、公演を続行する異例の事態が起きた。作品を地でゆく椿事だが、三谷の懸命さは劇の題名の精神の体現だ。可能性があるのなら、前進を止めない。その姿に、「演劇の力」と「観客」への信頼がにじんでいた。

やまぐち・ひろこ

朝日新聞記者。1960年生まれ。1983年朝日新聞社入社。東京、西部（福岡）、大阪の各本社で、演劇を中心に文化ニュース、批評などを担当。編集委員、文化・メディア担当の論説委員も務めた。武蔵野美術大学・日本大学非常勤講師。共著に『蜷川幸雄の仕事』（新潮社・2015年）。